

家庭学習応援教材  
とやましげひこ  
外山滋比古「思考の整理学」を読む

名城大学 農学部 2012 過程の演習 新国語問題集アシスト【現代文編】

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

知識は多ければ多いほどよい。いくら多くのことを学んでも、無限と言えるほどの未知が残っている。

万有引力のニュートンは次のように言ったと伝えられている。

「世間ではわたくしのことをどう思っているか、知らないが、自分では、自分のことを浜辺で遊んでいることもみたいだと思っている。ときどき珍しい小石や貝を見つけて喜んでいるが、向うにはまったく未知の真理の大海が横たわっているのだ」。

この真理の大海をきわめつくすことはできないにしても、知識が多ければ多いほどよいのははっきりしている。お互い小学校へ入ってから、つねに、知識の不足にひそかに悩んできた。とにかく、知識を仕込まなくてはならない。

それに気をとられていて、頭の中へ入った知識をどうするか、についてはあまり考えることがない。それでもの知りができる。もの知りは知識をただ保有しているだけ、ということがすくなくない。

「知識それ自体が力である」(ベーコン)  
と言うけれど、ただ知識があるだけでは、すくなくとも、現代においては力にはなり得ない。知識自体ではなく、組織された知識でないものを生み出すはたらきをもたない。

そればかりではない。知識の量が増大して一定の限度を越すと、飽和状態に達する。あとはいくらふやそうとしても、流失してしまうのである。だいいち、その問題に対する好奇心がうすれてきて、知識欲も低下する。

収穫通減しゅうかくていげんの法則、というのがある。

一定の土地で農作物を作るとき、それに投じられる資本と労力の増加につれて生産高は上がって行くが、ある限界に達すると、こんどは生産が伸びなくなっていく現象を支配する法則のことである。

似たことが知識の習得についても見られるように思われる。はじめは勉強すればするほど知識の量も増大して能率があがるが、かなり精通してくると、壁につき当る。もう新しく学ぶべきことがそれほどなくなってくる。なによりもはじめのころのような新鮮な好奇心が失われる。初心忘るべからず、などと言うのは無理である。

二十年、三十年とひとつのことに打ち込んでいる人が、そのわりには目ざましい成果をあげないことがあるのは、収穫通減を示している証拠である。この一筋につらなる、というのが、かならずしも、黄金律でないのもそのためだ。

知識ははじめのうちこそ、多々益々弁ず、であるけれども、飽和状態に達したら、逆の原理、削り落し、精選の原理を発動させなくてはならない。つまり、整理が必要になる。はじめはプラスに作用した原理が、ある点から逆効果になる。そういうところがいろいろなおこるが、これに気付かぬ人は、それだけで失敗する。

たとえて見れば、マラソンのレースのようなものである。前半は、スタート地点から遠くへ行けば行くほどよいが、後半は、逆に、スタート地点へ向って走る。スタートのところにゴールがあるからだ。

折返し点がある。そこをまわったら反対の方向を走る。折返し点をまわらずに、まっすぐ走り続ければ、いつまでたってもゴールはない。知的マラソンレースにおいても、折返し点をまわらないで突っ走るランナーがすくなくない。

折返し点以後では、ただ、知識をふやすだけではいけない。不要なものはどんどんすてる。

忘却の要については、すでにのべたが、これによって、思考に活力をもたらすことができる。

ここでは、いったんは習得した知識をいかにしてすて、整理するか、について考える。

家庭でガラクタがふえてくると、すてる。古新聞古雑誌がたまつて場ふさぎになる。たまってくる、屑に払ってしまう。これにためらいを感じる人はあるまい。そんなものをとっておいたのでは、人間の住むところがなくなってしまう。

一般に年寄りにはガラクタを大事にする傾向がある。菓子折の杉箱がみごとだと言って空箱を保存する。空箱が山のようになる。若い人はそれをすてようというが、老人はもつたいたないと行って譲らない。

新聞雑誌なら古いものはゴミにする人も、書物だと、かんたんにチリ紙交換に出したりしない。ひよっとするといえるかもしれないという気持が手伝うのであろう。しかし、いよいよ本があふれてくると、パニック状態に陥って、何でもかんでもすててしまえ、という衝動にかられる。よく考えもしないで、手当り次第に整理する。

さっぱりしたと思っていると、調べものをしていて、あの本に、と目星をつけた本が、売払ってしまったあとだったりする。やっぱり、めったなことでは本を売ってはならない。大は小を兼ねる、などどうそぶいて、また何でも保存するようになる。

こういう後悔をしなくてはならないのは、日ごろ整理の方法を考えなかったからである。集めるのも骨であるけれども、すてる、整理するのは、さらにいっそう難しい。

知識について言っても、習得については、記憶、ノート、カードづくりなどいろいろ考えられているのに、整理についてはほとんど何も言わない。学校なども、知識の学習にはやかましく言うけれども、いっばいになった頭の掃除についてはまったく教えるところがない。忘却というのが、学習に劣らず、あるいは、それ以上に難しいことを知らずに学校を出してしまうのは、決して幸福なことではない。

ガラクタの整理ですら、あとになって、残しておけばよかったと後悔することがある。まして、知識や思考についての整理であるから、ひよっとしたら、あとで役に立つのではないかと考え出したら、整理などできるものではない。それでも、知識のあるものはすてなくてはならない。それを自然に廃棄して行くのが忘却である。意識的にすてるのが整理である。

いまかりに、Aの問題について、カードをとったのが一〇〇〇枚になったとしよう。こんなに多くては身動きができない。まず、いくつかの項目に分類する。分類できないものを面倒だからというので、片端から棄てるのは禁物。

この分類されたものを、じっくり時間をかけて、検討する。急ぐと、ひそんでいる価値を見落すおそれがある。ひまにまかせてゆっくりする。忙しい人は整理に適しない。とんでもないものをすてて

しまいやすい。整理とは、その人のもっている関心、興味、価値観（これらはだいたいにおいて同心円を描く）によって、ふるいにかける作業にほかならない。価値のものさしはつきりしないで整理をすれば、大切なものをして、どうでもいいものを残す愚をくりかえすであろう。

かりに、価値のものさしがあっても、ゴムでできていて、時によって、伸び縮みするようなら、これもまた没価値的整理と選ぶところが無い。こどもには整理をまかされない。こどもだけではない。他人に整理をゆだねられないのはこのためである。

すてるには、その人間の個性による再吟味が必要である。これは没個性的に知識を吸収するのに比べてはるかに厄介である。

本はたくさん読んで、ものは知っているが、ただ、それだけ、という人間ができるのは、自分の責任において、本当におもしろいものと、一時の興味との区分けをする労を惜しむからである。

たえず、在庫の知識を再点検して、すこしずつ慎重に、臨時的なものをして行く。やがて、不易の知識のみが残るようになれば、そのときの知識は、それ自体が力になりうるはずである。

これをもっともはつきり示すのが、蔵書の処分であろう。すてるのではないが、本を手放すのがいかに難しいか。試みた人でないとわからない。ただ集めて量が多いと言うだけで喜んでいてはいけない。

問 本文の著者の主張に合致するものを次のア～オのうちから、一つ選びなさい。

ア 知識をいくらか多く持ち合わせていても使えなければ意味がないので、知識は出来るだけ使えるものだけに止めておいた方がよい

イ 知識が単に知識で終わらず、力になり得るためには絶えず、得た知識を振り返り本当に必要な知識を吟味して残していくことが大切である

ウ こどもには整理が任せられないのは、整理するほどの十分な知識の在庫を持ち合わせていないからである

エ 得た知識はその場で要不要を判断することが、知識が飽和状態にならないための鉄則である  
オ 様々な知識への興味・関心は、人によってそんなに大きな違いはないので、慎重に時間をかけて整理すれば、だれが整理しても同じような整理になる

【解説】

◇本文の構成

知識が多ければ多いほどよい。

←しかし

知識量が飽和状態になると好奇心がうすれ、知識はふえなくなる。

←そのとき

削り落し・精選の原理を発動させ、不要な知識をどんどんすてる。

←しかし

急いで片っ端からすててはいけない。|| 整理するのは難しい。

←それゆえ

その人間の個性に基づいて時間をかけて検討しなければならない。

＝つまり

結論

本当におもしろいものを残し、一時の興味のものをすてる「在庫の知識の再点検」が、自分にとって「不易の知識を残す整理法」である。

【要旨】

知識が多ければ多いほどよい。しかし、知識量が飽和状態になると収穫逓減の法則がはたらくので、不要なものをどんどんすてて整理しなければならない。その人間の個性に基づいて時間をかけて検討し、自分の責任において、本当におもしろいものと、一時の興味との分類・整理をする、つまり「在庫の知識の再点検」をしていくのである。

【解答】

イ

アの「使えなければ意味がない」という実用主義的な考え方は本文にはない。

ウの「十分な知識の在庫を持ち合わせていないから」は×。こどもに整理がまかせられないのは、「価値のものさしがはっきりしない」からである。

エの「その場で要不要を判断する」が×。本文には「じっくり時間をかけて」とある。

オは「人によってそんなに大きな違いはない」が×。本文に「すてるには、その人間の個性による再吟味が必要である」とある。